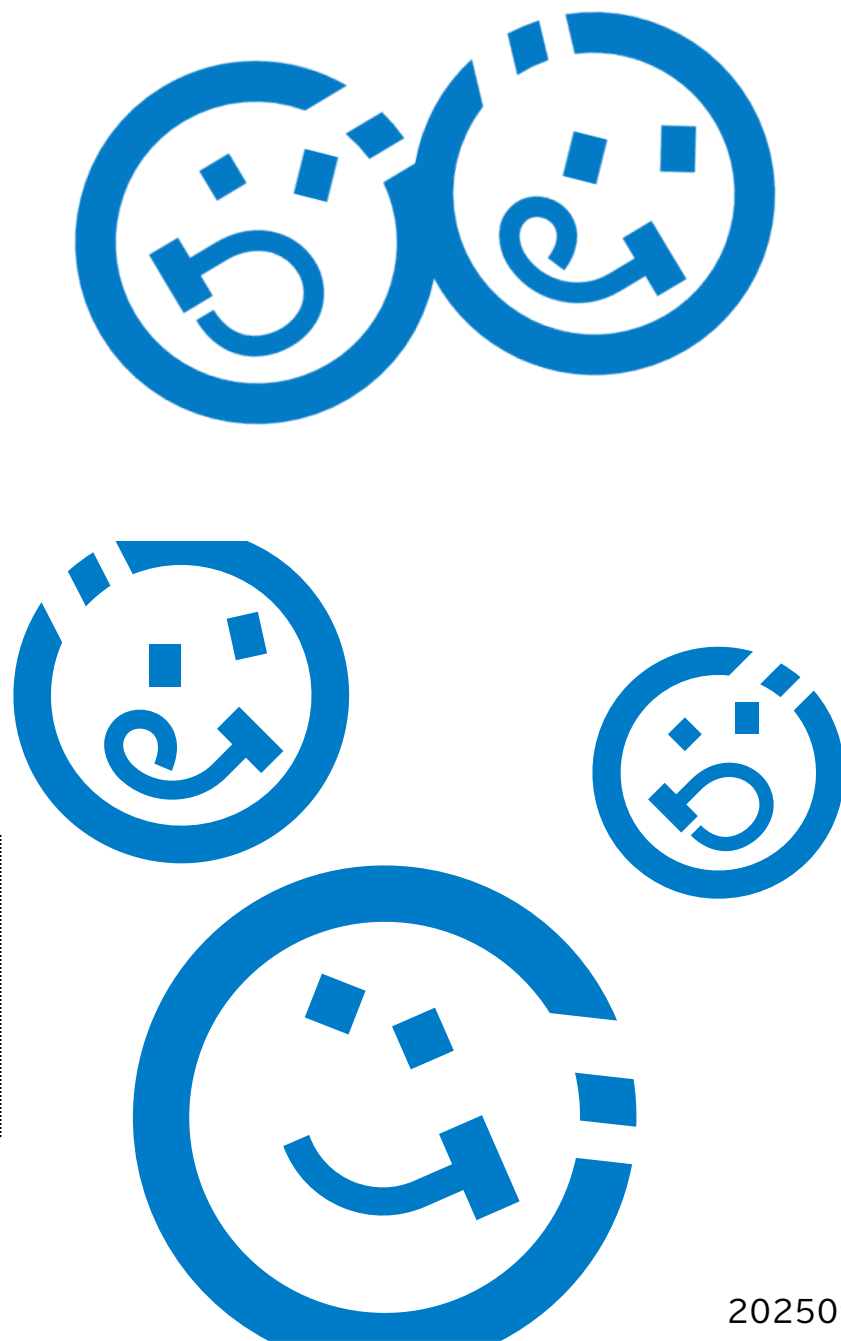


第4回 お金と経済

本資料は、金融経済教育推進機構(J-FLEC)が作成したものです。ご使用にあたっては、下記リンク先の「講義資料の使用に関する留意事項」をご確認ください(クリックすると、J-FLEC HP(金融経済教育推進会議 大学連携講座ページ)に遷移します)。[大学連携講座](#)
本資料は、中立・公正な立場から金融経済教育を実施することを目的としており、特定の金融商品の勧誘を意図しておりません。J-FLECは、インターネットを通じて提供されている情報を含め、信頼性が高いとみなされる情報等に基づいて本資料を作成しておりますが、当該情報が正確である事を保証するものではありません。また、本資料の内容等は予告なしに変更される事があります。

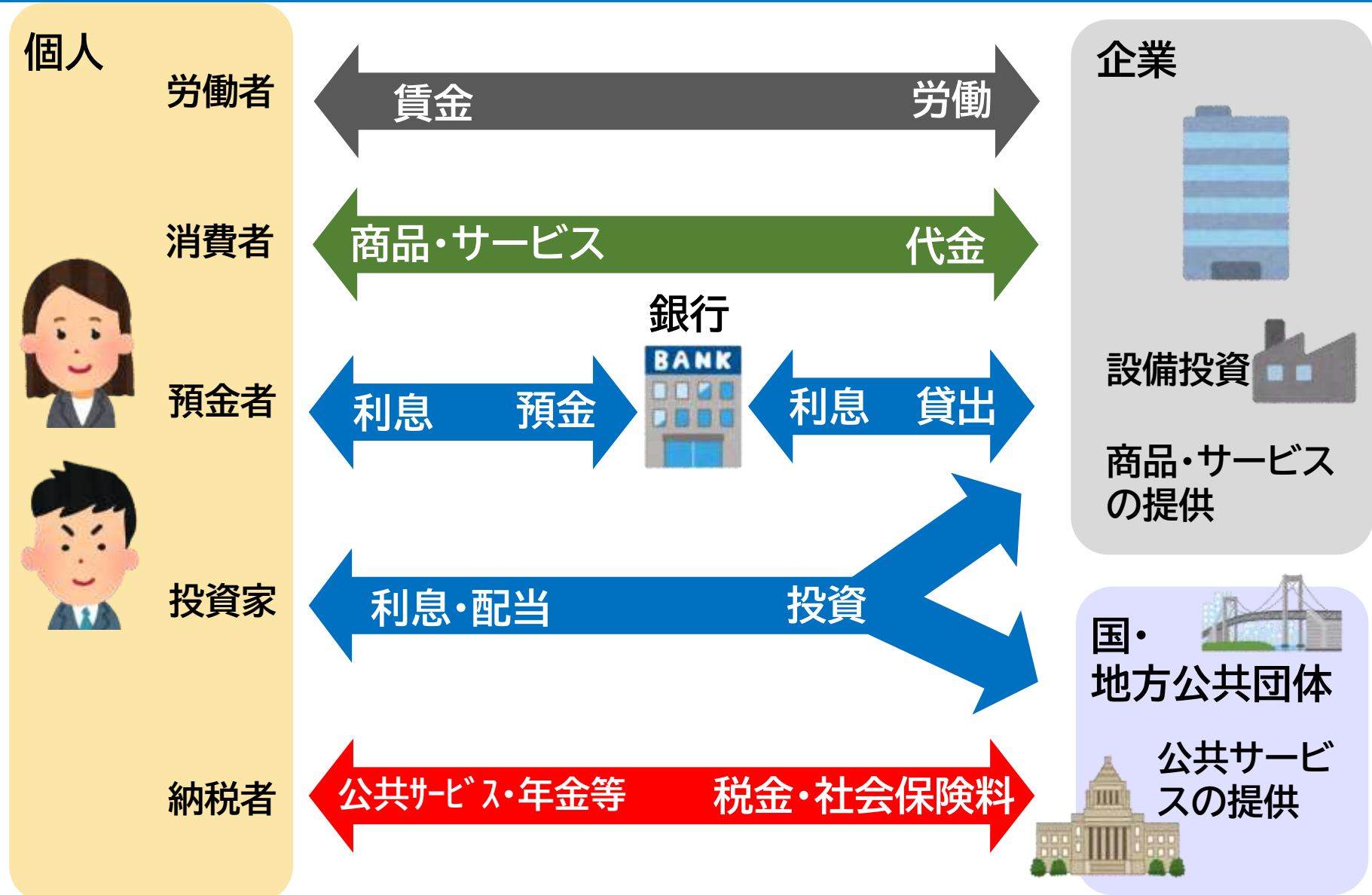


CONTENTS

- ① お金と経済
- ② 金利の知識
- ③ リスクとリターン



1 お金と経済



物価

商品やサービスの
値段

商品やサービスを、
■買いたい人(需要)と
■売りたい人(供給)との
バランスで決まる。

賃金

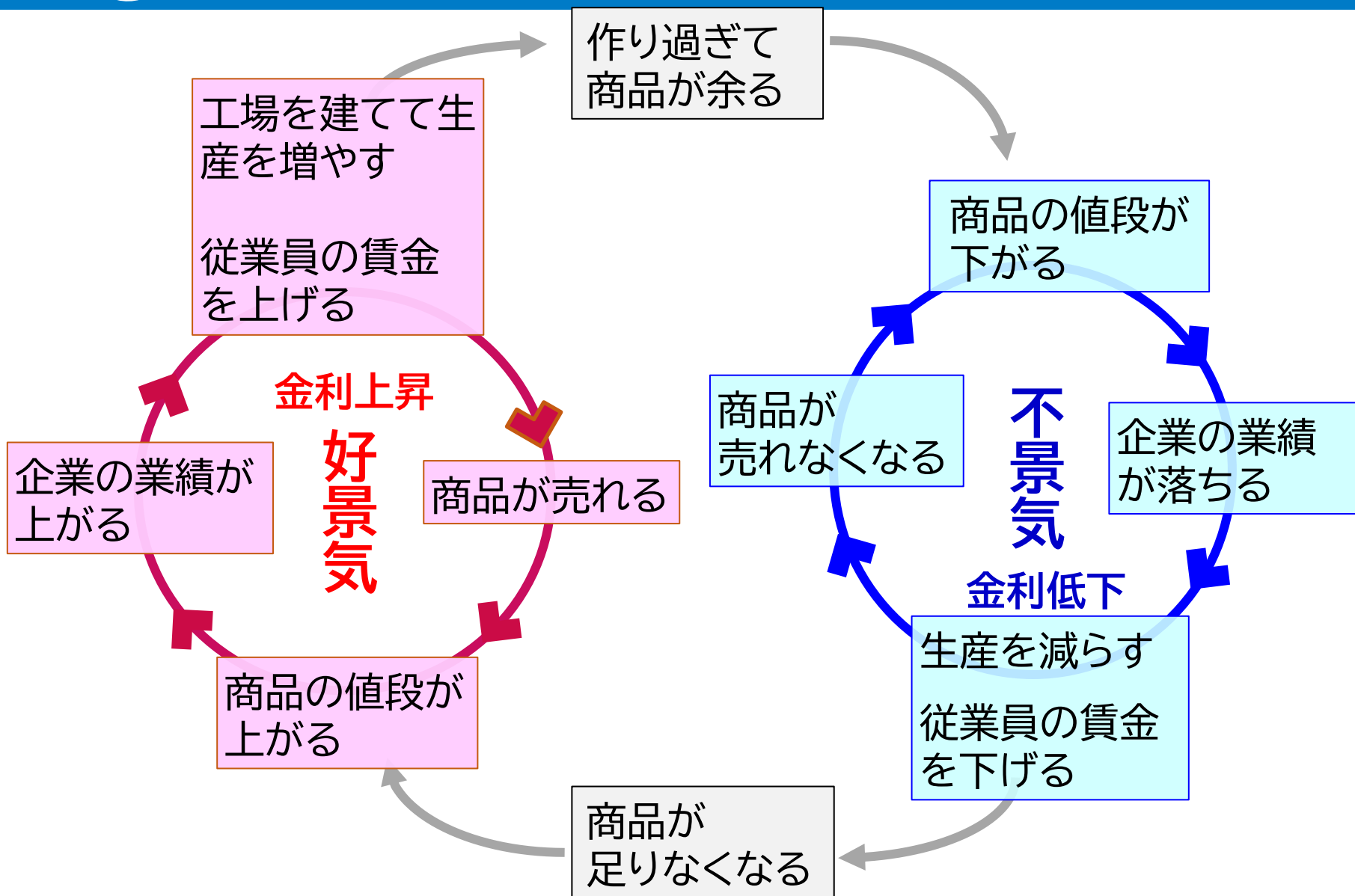
提供する労働の
値段

労働力を、
■雇いたい人(需要)と
■提供したい＝働きたい人(供給)と
のバランスで決まる。

金利

貸し借りするお金
の値段(使用料)

お金を、
■借りたい人(需要)と
■貸したい人(供給)との
バランスで決まる。

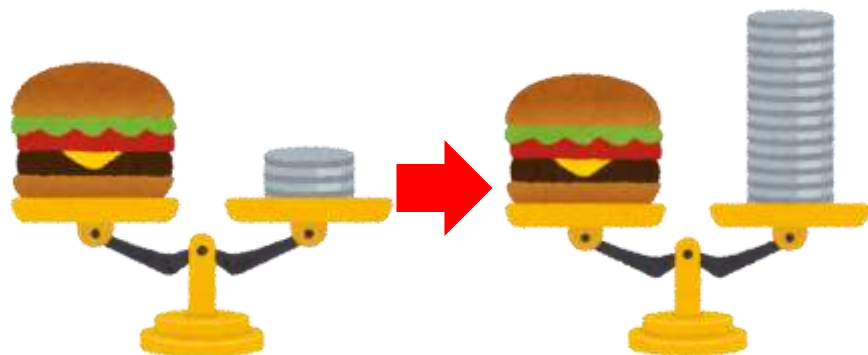


○ 景気が良いとき(悪いとき)に、賃金、物価、金利はどのように変化すると思いますか？

	景気が良い	景気が悪い
賃金	() 企業収益が 〔 〕から	() 企業収益が 〔 〕から
物価	() 家計の消費が 〔 〕から	() 家計の消費が 〔 〕から
金利	() 銀行などからお金を借りたい 企業が〔 〕から	() 銀行などからお金を借りたい 企業が〔 〕から

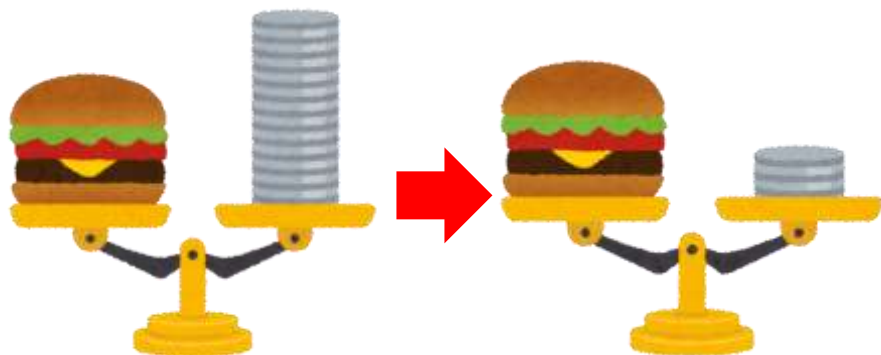
○ インフレ・デフレとはどのようなものなのでしょうか？

インフレーション(インフレ)



物価が継続的に上がり、お金の価値が継続的に下がること。
モノの値段が上がることで、企業の利益が増え、働く人の給料も上がる等、社会にお金が循環して景気が上昇していく。

デフレーション(デフレ)



物価が継続的に下がり、お金の価値が継続的に上がること。
モノの値段が下がることで、企業の利益が減り、働く人の給料も増えない等、景気は停滞していく。

○ 世界で起きているインフレには以下の態様があります。

	事 象	中央銀行の対応
ディマンド・プル型	- 景気全般が過熱し、物価上昇が加速 - 賃金の上昇を伴うことが多い	物価上昇を抑制するため、金利を引き上げる
ボトルネック型	- モノ不足やエネルギー価格上昇によって物価が上昇 - 企業や家計の所得が減少	景気の悪化を防ぐため、現状維持（金融緩和）

○ 景気の変動は、株価や債券価格など、金融商品の価格にも影響を与えます。

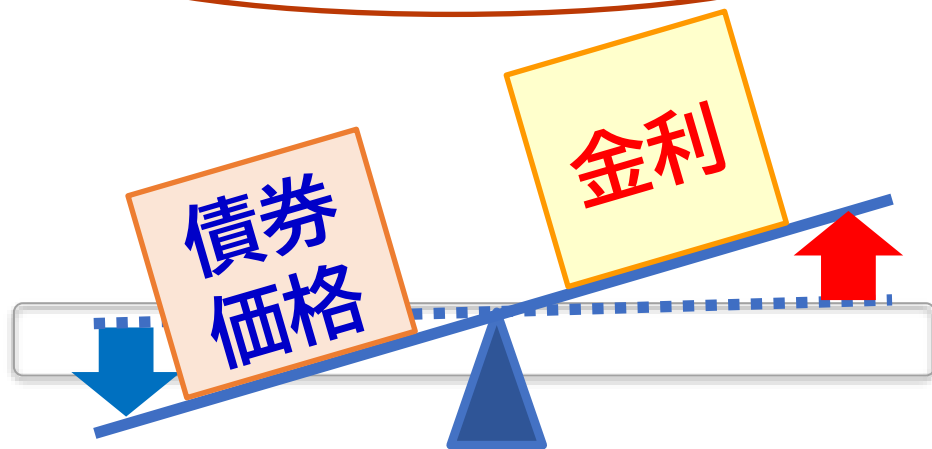
	景気が良い	景気が悪い
株価	() 企業の業績が 〔 〕から	() 企業の業績が 〔 〕から
債券 価格	() 金利が 〔 〕から	() 金利が 〔 〕から

※なお、株価には人々の「期待」も大きく影響します(個別企業株、株価全体とも)。
先行きの景気や業績に対する過度な楽観が生まれたときには、株価はバブルの様相を呈することもあります。過度の悲観に見舞われた場合には、暴落することもあります。

○ 金利と債券価格の具体的な関係を見ていきましょう。

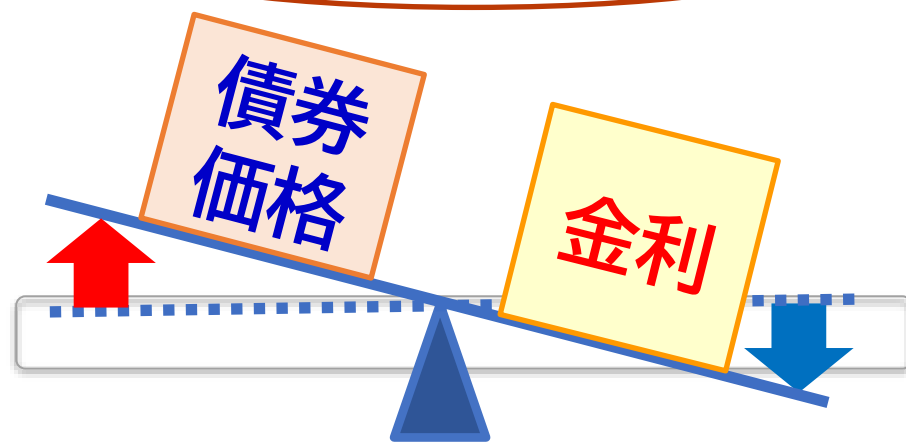
【例】発行時の**債券価格**が100円、利率が**2%**の場合

金利が3%に**上昇**



2%の債券の魅力が**down**
⇒ 債券価格が**低下**し
利回りは**上昇**する

金利が1%に**低下**



2%の債券の魅力が**up**
⇒ 債券価格が**上昇**し
利回りは**低下**する

- 各通貨の『**交換比率**』を示すものです。
- 一般的に1ドル=〇〇円というように、1ドルに交換するにはいくらの円が必要か、といった尺度で示されます。『〇〇の数字が小さくなるほど(相対的に)円の価値が**上昇(=円高)**します』。

2011年10月には75円台を記録

円高

円安

2024年は30数年ぶりの160円台

※日本円の通貨価値は、米ドルと比較して評価するのが一般的。これは、世界貿易における決済通貨としては米ドルが最も多く用いられていることや、日本の貿易相手国の中では米国が中心的な位置を占めているため。

- 以下のように様々な変動要因があり、かつその影響は局面によって表れ方が異なります。
- 外国為替相場の予測は非常に困難な面があります。

外国為替相場の変動要因

- ✓ 外国為替に対する需要
- ✓ 各国の実体経済
- ✓ 金利動向
- ✓ インフレ動向
- ✓ 地政学リスク(安全志向)
- ✓ 市場参加者の思惑(投機)

○ 経済主体や事業内容・規模によって大きく変わります。

	円 高	円 安
物価	輸入物価は低下	輸入物価は上昇 エネルギー価格も上昇するため、広範な主体に悪影響
企業活動	- 輸出企業や海外で事業展開する企業には収益上マイナス - 反面、家計や内需型の中小企業にはプラス - かつての円高局面では、製造業の生産拠点が海外へシフトしたことも	- 輸出企業や海外で事業展開する企業には収益上プラス - 反面、家計や内需型の中小企業にはマイナス
訪日外国人	- 減る - 観光産業にはマイナス	- 増える - 観光産業にはプラス

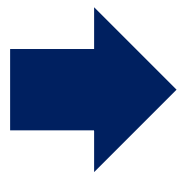


2 金利の知識

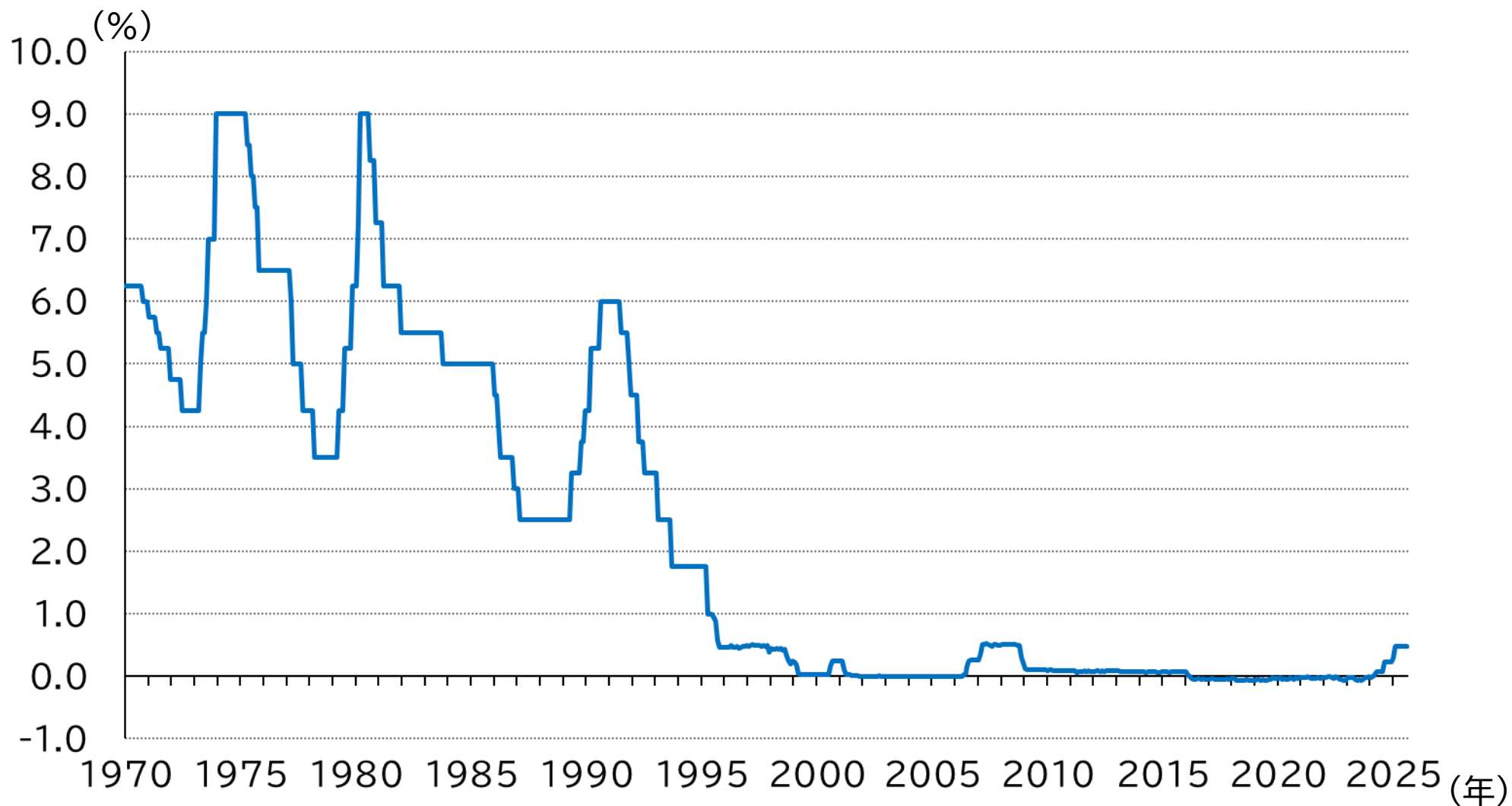
- 各金融機関は『**市場金利**』を参考に、『**借り手の信用度**』などに応じて金利を決めます。

市場金利

金融機関の間で、日々、資金の貸し借りが行われる場は**金融市場**と呼ばれ、資金の需要と供給がバランスする水準に金利が決定される。これを**市場金利**という。



金融機関によって金利が異なる場合があるので、比較することが重要。



(出所)日本銀行

(注)1995年6月までは公定歩合(基準貸付利率)、1995年7月以降は無担保コールレート・O/Nの月平均金利

○ お金の貸し借りには『**利子・金利**』がかかります。

利子(利息)

借りたり貸したりしたお金に、一定の割合で支払われる対価(お金)です。

金利(利率)

お金を貸したり借りたりする時の「値段」です。
元本に占める利子の割合(%)で表示されます。

○ 預貯金や投資では、『**単利**』と『**複利**』という考え方があります。

－ 単利: 元本のみに利息がつく計算方法

－ 複利: **元本と利息を合わせた額に利息がつく計算方法**

100万円を利率5% で運用する場合(税金等は考えない)

単利の場合

1年後: $100\text{万円} + 100\text{万円} \times 5\% = 105\text{万円}$

2年後: $105\text{万円} + (100\text{万円} \times 5\%) = 110\text{万円}$

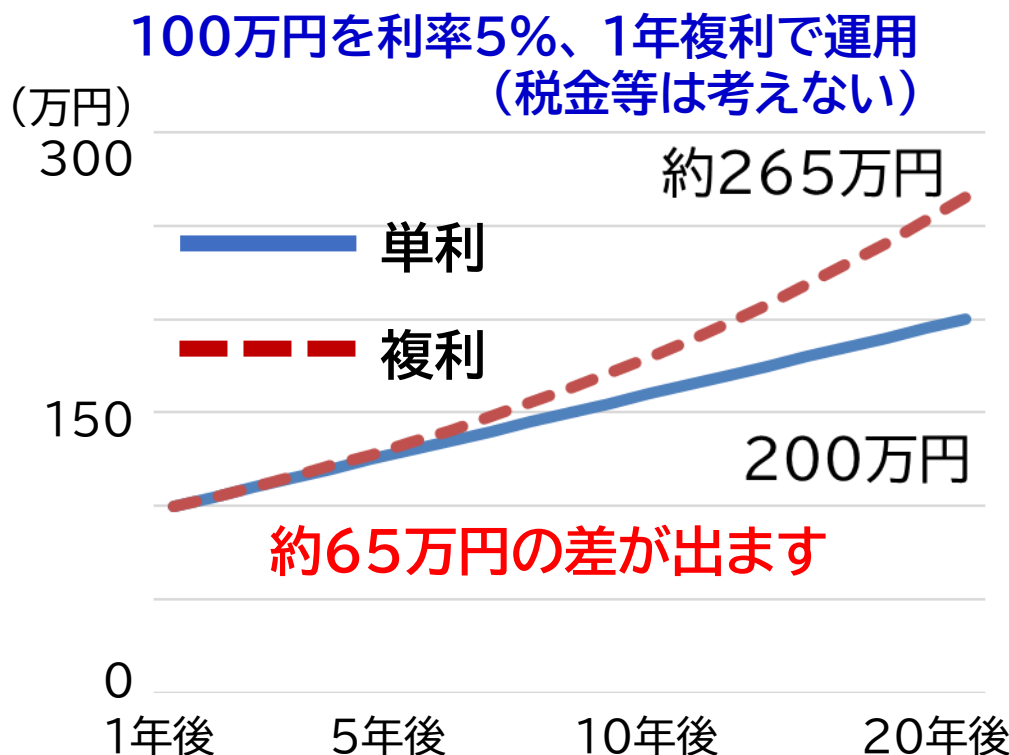
複利の場合

1年後: $100\text{万円} + 100\text{万円} \times 5\% = 105\text{万円}$

2年後: $105\text{万円} + (105\text{万円} \times 5\%) = 110\text{万}2500\text{円}$

複利の場合は元本の100万円だけではなく、利息の5万円にも利息がつくため、より多く資産が増えることになります。

- 『単利と複利では長期間で考えると大きな差』が出ます。
- 『72の法則』でお金が2倍になる金利・期間が分かります。



72の法則

『 $72 \div \text{利率}(\%) \div \text{お金が2倍になるために必要な期間}$ 』

利率3%で運用した場合

$72 \div 3 \div \text{約24年}$

利率5%で運用した場合

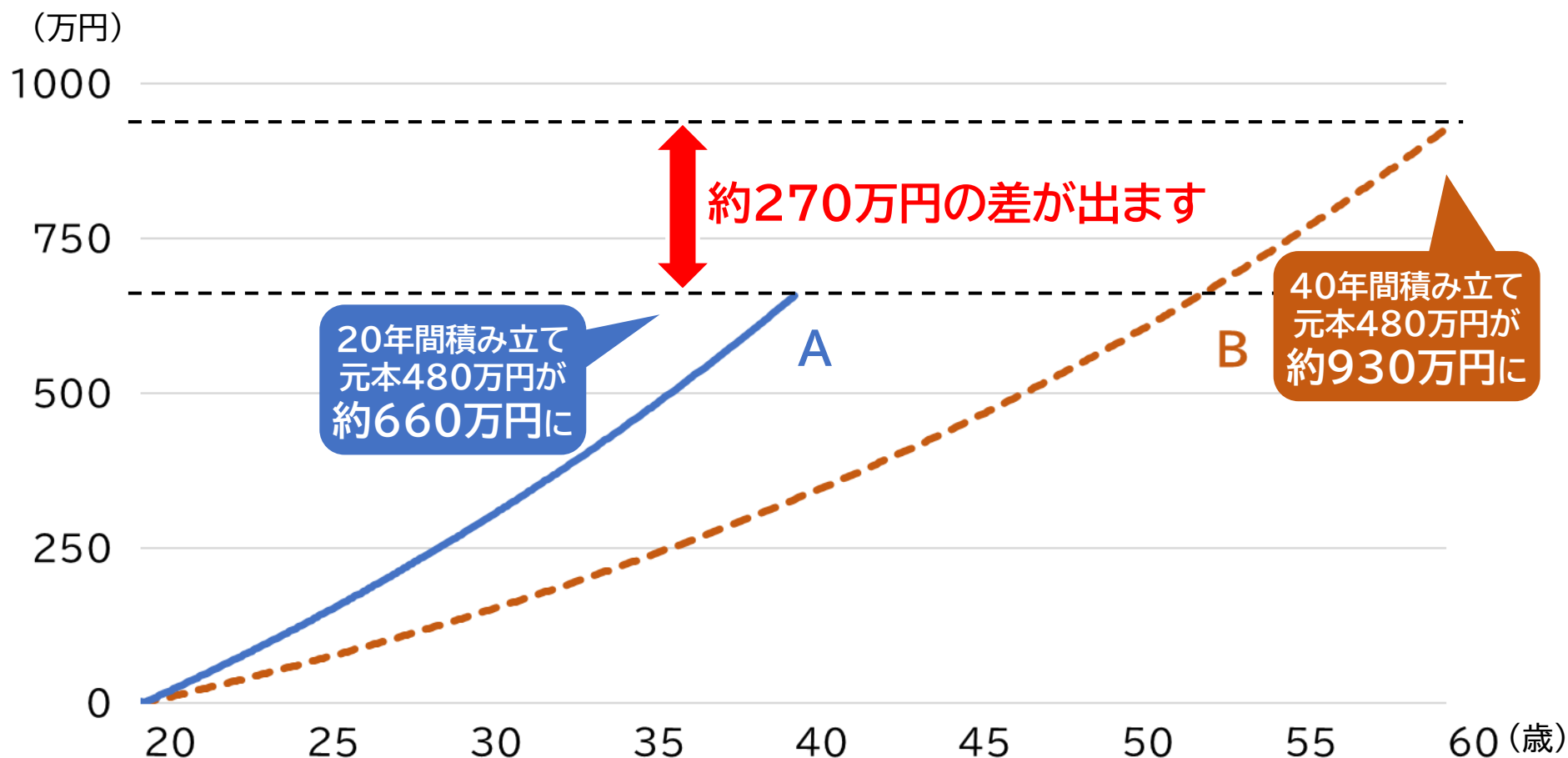
$72 \div 5 \div \text{約14.4年}$

※72の法則は、複利での運用を前提としています。
あくまでおおよその目安で税金は考慮していません。

複利の効果を得るためにも、資産形成は
長い時間コツコツ続けていくことが重要です。

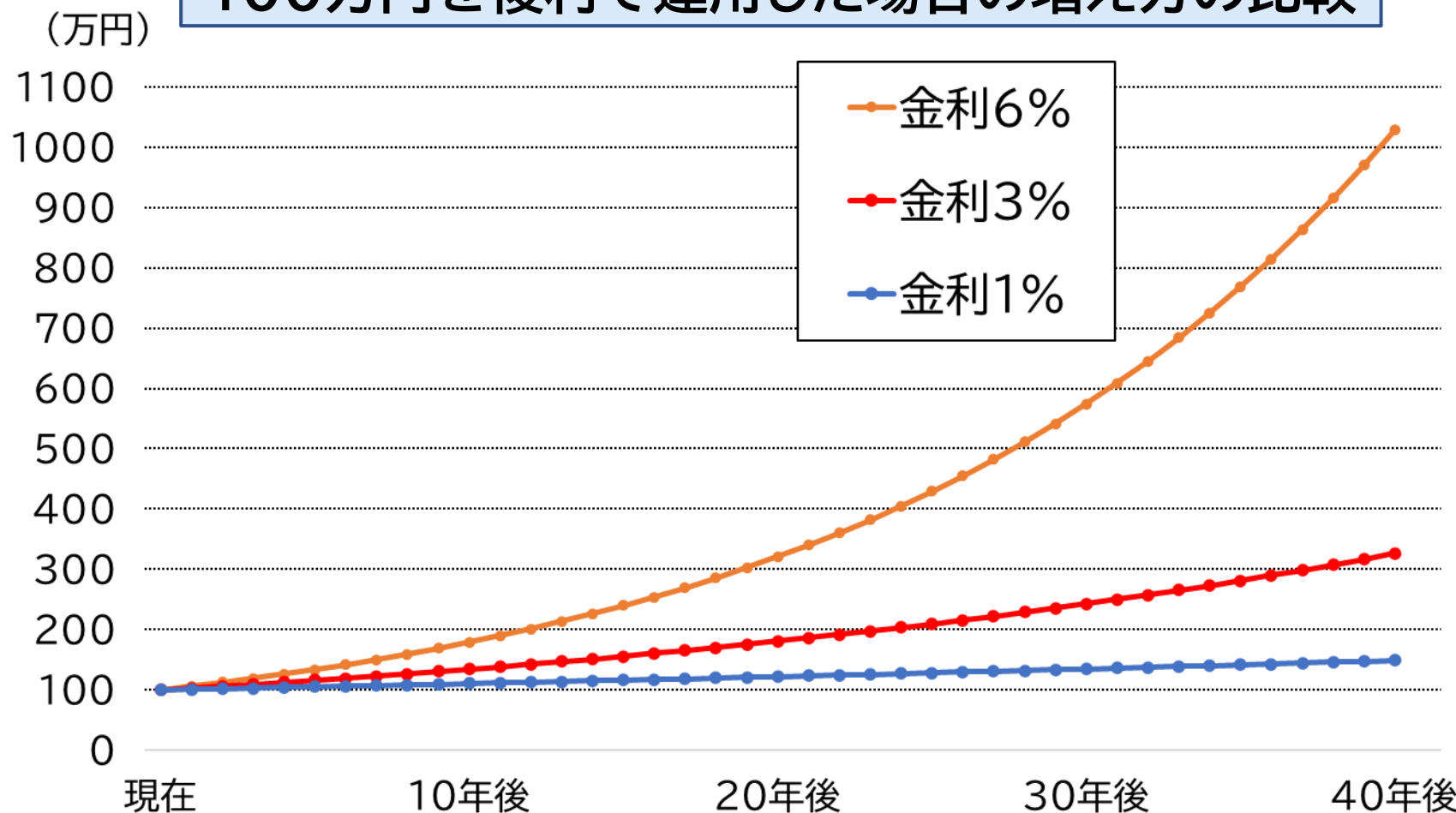
○『長い期間投資を続けると複利効果が大きく』なります。

同じ利率3%で、A.毎月2万円を20年間、B.毎月1万円を40年間積み立てた場合を比較すると、以下のような差が出ます。



○ 複利で利子が増えていく効果は、金利が高いほど大きくなります。

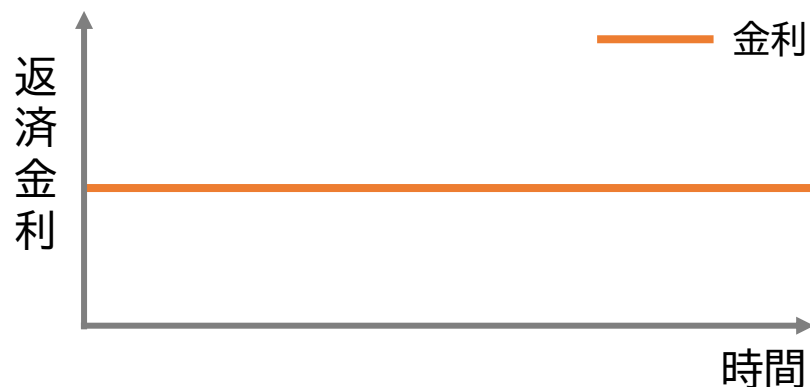
100万円を複利で運用した場合の増え方の比較



○ 多くの金融取引では、当事者間で固定金利か変動金利のいずれかを選択します。

- ・ 固定金利：契約期間中、市場金利の動きと関係なく同一の金利を適用するもの。
- ・ 変動金利：契約期間中、市場金利の動きを参考に、予め定めたルールで適用する金利を変更するもの。

固定金利型



変動金利型



○ どちらの金利が有利かは、下記2点によって変わります。

①お金を運用する側か or 借りる側か

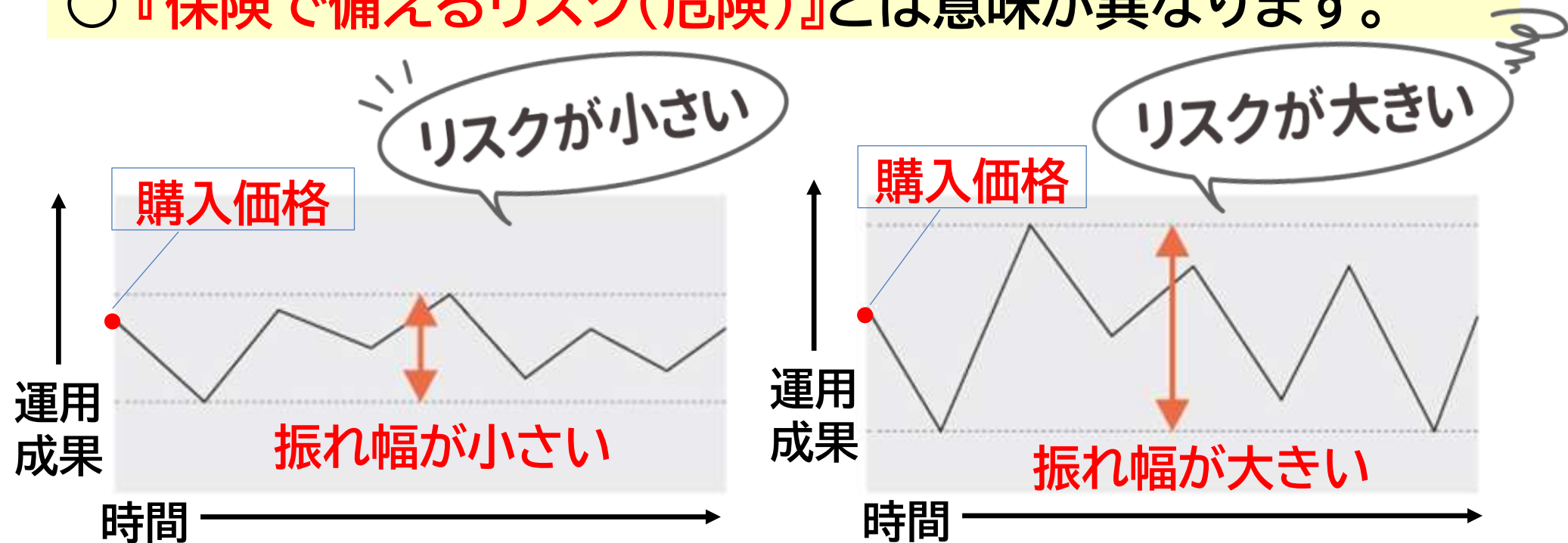
②市場金利の見通しが上昇するか or 低下するか

		市場金利の先行き見通し	
		上昇する	低下する
運用	固定金利		
	変動金利		
借入	固定金利		
	変動金利		

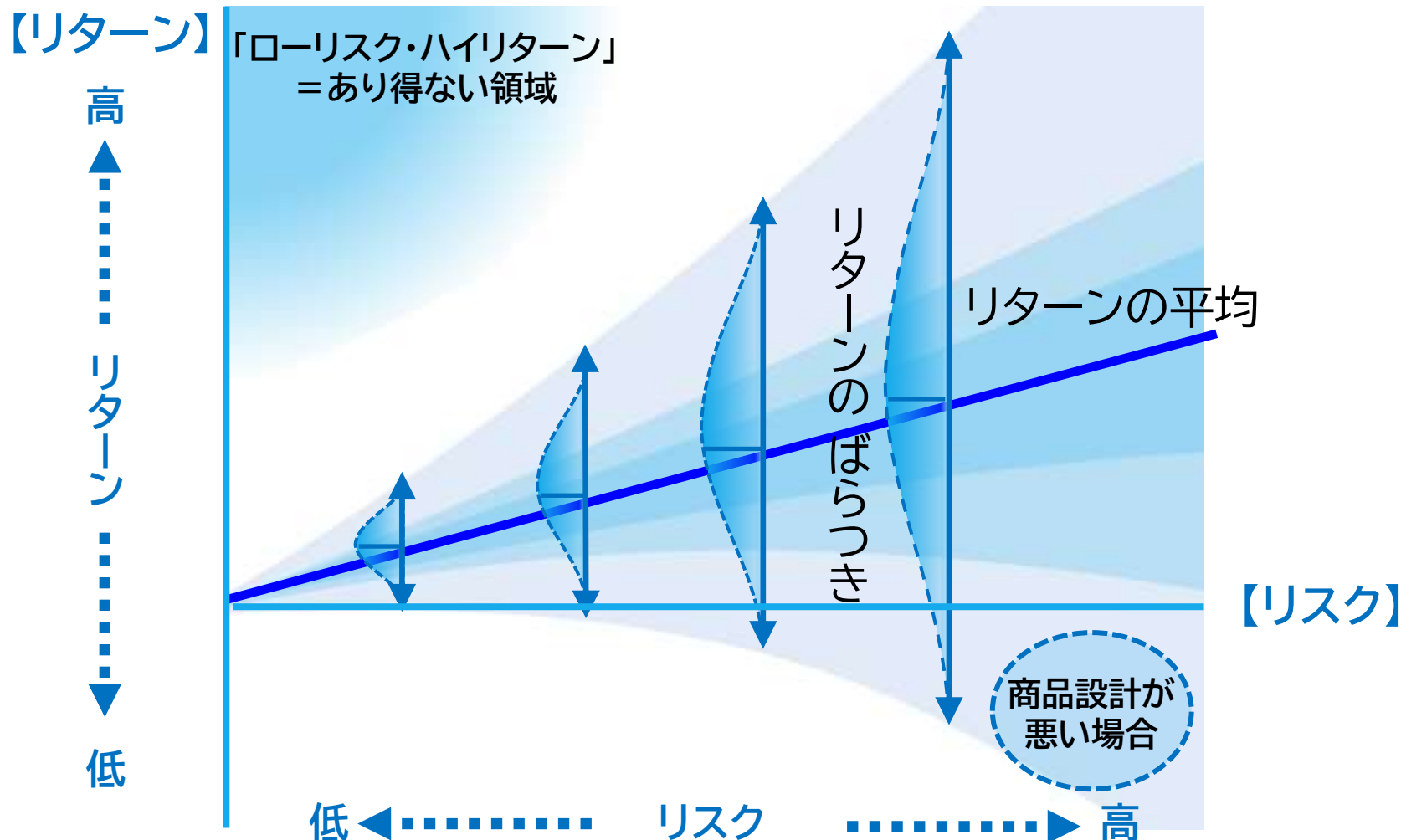
※ なお、市場金利の見通しが上昇も低下もしない場合、お金を運用する側には金利が高い方が、借りる側には金利が低い方が有利。

③ リスクとリターン

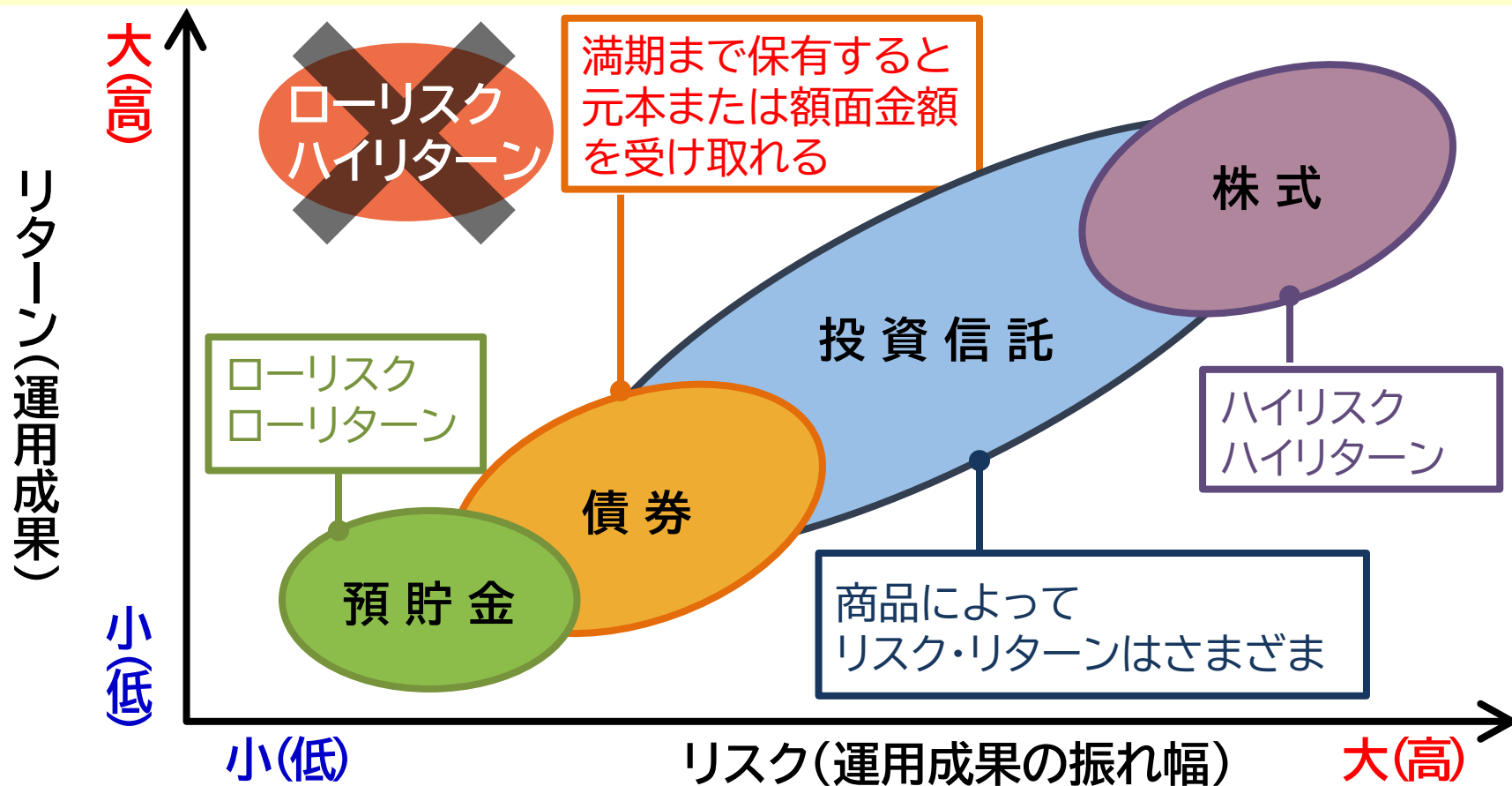
- 資産運用におけるリスクとは『運用成果の振れ幅』のことを指します。「リスクが大きい」とは、「とても危険」という意味ではなく、「大きく儲かるかもしれないし、大きく損をするかもしれない」(運用成果の振れ幅・不確実性が大きい)という意味です。
- 『保険で備えるリスク(危険)』とは意味が異なります。



○ 原則、リスク(運用成果の振れ幅)とリターン(運用成果)は比例関係にあります。



- 原則、リスク(運用成果の振れ幅)とリターン(運用成果)は比例関係なので、『**ローリスク・ハイリターンの金融商品はありません**』。



※一般的なイメージ図であり、すべての金融商品があてはまるものではありません。

○ 金融商品は3つの観点(安全性・収益性・流動性)で整理できますが、『3つとも◎の金融商品はありません』。

	安全性 元本や利子の 支払いが確実か	収益性 大きい収益が 期待できるか	流動性 必要なときに すぐに換金できるか
預貯金	◎	△	◎
株式	△	◎	○
債券	○	○	△
投資信託	△～○	○～◎	○

- お金が流通することで経済活動が支えられています。経済活動には景気循環があり、一般的に、好景気では物価や賃金、金利が上昇し、不景気ではそれらが低下します。
- 為替変動の影響は経済主体によって異なり、相場の予測は困難です。
- 金利はお金を貸し借りする際の値段であり、需要と供給、政策金利の影響を受けます。金利上昇により債券価格は下落します。
- 金利には複利と単利があり、利子にも利子が付く複利の効果は、金利が高いほど、期間が長いほど大きいです。
- リスクとリターンには比例関係があり、ローリスク・ハイリターンという「うまい儲け話」はありません。